高野切本古今和歌集の復元

森岡　隆

目次

本書では、巻第八・離別（365～405番歌の41首完本。国宝、毛利博物館蔵、414.2㎝）と、巻第二十・雅（1069～1100番歌の31首完本中、1077・1095の2首脱。国宝、土佐山内家宝物資料館保管、262㎝）を除く十八巻の推定復元を掲載した。

一、高野切本古今和歌集の概要 …… 1

伝称筆者と伝来
巻第二十と巻第五の奥書
分割と名称の由来
寄合書きと伝存状況
成立年代と筆者
紙面構成
書風の特徴

二、復元の方法 …… 5

底本の選定
所用料紙
歌中に漢字を交えない原則
字典の活用
内題・奥題の表記と書体
巻末の余白
表紙と外題（題簽）

三、高野切本古今和歌集 復元全巻の完成 …… 7

巻第一・巻第二・巻第三・巻第四・巻第五・巻第六・巻第七・巻第九・巻第十・巻第十一
巻第十二・巻第十三・巻第十四・巻第十五・巻第十六・巻第十七・巻第十八・巻第十九
古筆復元、原本再構築の試み …… 13
「高野切古今集」巻二―一三一番歌模写断簡出現の意義 …… 14
「高野切古今和歌集」巻第五の2葉の断簡について（橋本貴朗）…… 19

四、「高野切本古今和歌集」復元全巻完成記念展 …… 39

会場写真
新聞記事（同展報告にかえて）

表　紙：復元全巻（芸術新潮・筒口直弘氏撮影）
裏表紙：高野切本古今和歌集巻第二十・巻末
（土佐山内家宝物資料館編『土佐藩主山内家の至宝　国宝と重要文化財』所載）

一、高野切本古今和歌集の概要

伝称筆者と伝来

高野切本古今和歌集（以下、高野切）は、雲母砂子を撒いた麻紙系の料紙に、延喜五年〈九〇五〉ころ、勅撰和歌集の嚆矢として成立した『古今和歌集』を書写したもの。巻第二十（完本・国宝。土佐山内家宝物資料館保管）の巻末に記された後奈良天皇〈一四九六―一五五七〉の天文十三年〈一五四四〉三月十五日の奥書、

此集撰者之筆跡之由／古来所称云々尤為奇／珍者乎一覧之次聊記之／（花押）

（／改行、稿者。以下同様）

此の集撰者の筆跡の由、古来称する所なりと、云々。尤も奇珍と為すものか。一覧の次いでに聊かこれを記す。（花押）

から、当時すでに紀貫之筆と伝えられていたことがわかる（裏表紙参照）。なお、この奥書筆者を究明したのは久曽神昇氏で、『後奈良天皇宸記』天文十三年三月十五日条に、

十五日、自陽名古今集奥書之事被申、貫之筆也、近比無比類事也、

十五日、陽名より古今集奥書の事申さる、貫之の筆なり、近比比類無き事なり。

とあることを指摘したうえで、[1] 昭和三十六年〈一九六一〉の著『古今和歌集成立論』研究編において、

「奥書之事、被レ申」とあるのは、貫之自筆の識語の存した意にも解されないことはなからうが、「被レ申」といふ語を注意すれば、識語揮毫の依頼を受けられたものと解すべきであり、前掲の識語を参照すれば、容易に理解せられるであらう。天文十三年三月には、近衛尚通もまだ七十二歳で生存中ではあつたが、すでに出家して十余年になり、この年八月に歿した。その子稙家はすでに四十三歳で、従一位、准三宮、前関白、前太政大臣であつたので、その依頼を受けられたのであらう。なほ後奈良天皇は御在位中で、宝算四十九歳でいらせられた。現存完本のうち巻八にはこの識語はなく、また完本の転写本を伝へてゐる巻十八にも識語はない。近衛家にそれらが襲蔵せられてゐなかつたのではなく、恐らく巻五、十、十五、二十などにのみ記されたのであらう。かくて高野切は、近衛家に襲蔵せられて室町時代に及び、その後に豊臣秀吉、その他の人々によつて、次第に流出したのではあるまいか。

と推定した。[2] 父尚通〈一四七二―一五四四〉ではなく、子稙家〈一五〇三―六六〉からの依頼と見ることは、すでに東京大学史料編纂所編『史料綜覧』巻十（昭和十三年、同四十年復刻）の同日条に「近衛稙家、紀貫之筆ノ古今和歌集ニ奥書ヲ書シ給ハランコトヲ請フ、後奈良院宸記」とあるとおりである。

後奈良天皇は後柏原天皇〈一四六四―一五二六〉の第二皇子。父帝ともども能書で、この系譜は後世、後柏原院流と称される。天皇、しかも能書だからこそ、近衛家に伝来した重宝の本紙そのものに揮毫できたのであろう。ともあれ、天文十三年三月十五日までは、全二十巻が五摂家筆頭の近衛家に伝来していたことは確かである。

巻第二十と巻第五の奥書

巻第五（国宝。個人蔵）の巻末にも巻第二十と同文同様の識語が添えられている。これについての久曽神氏の見解は右に引用したとおりだが、春名好重〈一九一〇―二〇〇四〉が「巻五の巻末にも、巻二十の奥書と同じような奥書があり、やはり同じような花押を据えている。しかし、巻二十の奥書はすなおにして巧妙であり、自然であるが、巻五の奥書は不自然で巧妙とはいえないから、同筆とは認められない」とつとに指摘したとおり、[3] 後奈良天皇の筆跡ではない。が、続けて「巻五の奥書ももとは後奈良天皇の宸翰であったのであろうが、切り取られて、その代りに誰かが模写したのが継ぎ足されたらしい」と見るのは首肯しがたい。

巻第五の巻末十一紙も約五三センチの紙幅があり、切除したとすれば、その後に継がれていたであろう十二紙ということになる。同巻では、

・三紙と四紙の継ぎ目に二六七番歌作者の「さかのうへのこれのり」
・五紙と六紙の継ぎ目に二七七番歌下の句
・七紙と八紙の継ぎ目に二八三番歌下の句

の字がかかり、同じく完本の巻第八でも、

・二紙と三紙の継ぎ目に三七五番歌の二行目

・五紙と六紙の継ぎ目に三九〇番歌作者の「つらゆき」
・七紙と巻末八紙の継ぎ目に四〇三番歌下の句

の字がかかるなど、事前に本紙を継いだ状態で筆者に託されたことが窺える。これは、同筆の桂本万葉集巻四（後掲）など巻子本で散見されることであり、だからこそ、後述の「巻末の余白」の項のような措置がとられたのである。巻第五が十二紙まで継がれていたとすれば、約五三センチの紙幅に何も書かれず、余白のまま残されていたことになり、能書の作法としてはあり得ないことである。

巻第五のほうは、別紙を加えて、それに書かれている。筆意も渋滞して精彩を欠く。しかも、花押の筆順をたどることができないので、模写であることが明らかである。この巻第二十の奥書と、草書の崩し字体などが、全く適合する。とすると、これは、巻第二十の奥書を形どおりに写して、この巻第五の巻末に貼付したものと思われる。つまり、この「高野切」の奥書は、一セットとして伝存していた『古今集』二十巻の最終巻末たる巻第二十の一巻にだけ加えられていたものなのである。

との解釈に従うものである。[4]

なお、この巻第五の奥書は江戸期の書と見て大過ないであろうが、[5]金銀砂子を霞引きし、金の切箔を撒いた見返しの技巧から、江戸前期に表紙を改装したと指摘されるのであってみれば（後述「表紙と外題（題簽）」の項参照）、[6]そのときに奥書が追補された可能性があろう。

分割と名称の由来

高野切の最も早い分割の記録は、巻第九・羈旅歌の巻頭十七行の断簡（重要文化財。湯木美術館蔵）に付属する添状のうち、

覚
紀貫之筆古今集羈旅之部巻頭
天の原の哥　元来大閤（ママ）秀吉公ヨリ
高野山文珠院拝ー領レ之　子細有レ之テ
其後文珠院ヨリ　正盛公（江）傳
文珠院ハ高山上人也

と記された覚書である。[7]「文珠院」は文殊院、「高山上人」は興山上人、すなわち文殊院の住持・木食応其〈一五三六―一六〇八〉のことで、天正十三年〈一五八五〉四月、高野山に帰順を促した豊臣秀吉〈一五三六―九八〉と和議を結んだ応其に、秀吉が帰依。以後、高野山再興の援助をしたが、そうした中で巻第九も与えられたというのが通説となっている。[8]なお「正盛公」は、この覚書の左の貼紙に記されたとおり、中根壱岐守正盛〈一五九八―一六六五〉である。

以上は、久曽神氏の前掲著『古今和歌集成立論』の引用箇所の直前で言及されているように、右の覚書など添状を実見調査した田中塊堂〈一八九六―一九七六〉によって導かれたことである。ただ、塊堂は巻第九の一巻を秀吉から拝領したと解し、その後の流出の最後が「巻子などの長巻にあつては寺として後証の為め、その片鱗を留めてお」いた巻頭断簡であったと解している。[9]秀吉から拝領した当初から、内題「古今倭歌巻第九」・部立「羈旅歌」以下、四〇六番歌「あまのはらふりさけみればかすがなる／みかさのやまにいでしつきかも」（濁点稿者、以下同様）という阿倍仲麻呂の歌と、その左注十一行の十七行であったのか否かは措くとして、後奈良天皇が巻第二十に奥書の宸筆を染めた天文十三年〈一五四四〉から、わずか四十年の間に近衛家から流出し、分割され始めたことは確かであろう。そうした中、巻第五と巻第八が完本で遺り得たのも幸運であるが、巻第二十は、後奈良天皇の奥書が添えられていたからこそ、切断を免れたのであろう。

ともあれ、右のような事情が「高野切」という名の由来だが、切名の初見は巻第十八―九八三・九八四番歌断簡（香雪美術館蔵）に付属する、

紀貫之朝臣筆
巻物切哥二首
古今集雑下部
わかいほは
世々高野切ト云
右真蹟無疑者也
己酉四月　古筆了仲（印）「鑑斎」

と記された、古筆別家三代了仲〈守直。一六五六―一七三六〉の己酉〈享保十四年＝一七二九〉四月の折紙とされる。[10]

寄合書きと伝存状況

高野切は紀貫之筆と伝称されてきたが、実際には三人の能書が寄合書きしたもので、その分担推定と伝存状況は次表のとおり。

これは、藤原行成〈九七二―一〇二七〉を始祖とする世尊寺家第六代伊行（これゆき）〈―一一四九―七五?〉が愛娘の伊子（後の建礼門院右京大夫）に書き与えた書論『夜鶴庭訓抄』で、法華経八巻の分担書写に際して「法華経一部を人々あまたにか、するに、一の巻八の巻をば、其中の手書にか、すべし」と記していることに合致する。寄合書きでは、最初（筆初め）と最後（筆止め）を首座の人が執筆する習わしがあり、第一種筆者が、三人中の首席であったことがわかる。

とはいえ、三人とも当代随一の能書で、各々左記のごとく一群の同筆・同系統古筆が伝存している。高野切各巻の推定復元において、詞書や作者名に漢字を交える際には、まずはこれらの中から検索してみることになろう。

【第一種】

1 大字和漢朗詠集切（東京国立博物館・サンリツ服部美術館等、分蔵）
2 深窓秘抄（一巻、国宝。藤田美術館蔵）
3 歌仙歌合（一巻、国宝。和泉市久保惣記念美術館蔵）
4 和歌体十種（零本一巻・断簡一幅、国宝。東京国立博物館蔵）
5 本院左大臣時平歌合（十巻本歌合第八巻所収、国宝。前田育徳会蔵）

【第二種】

左記「成立年代と筆者」の項で後述の二点のほか、

1 桂本万葉集巻四（零本一巻、御物。断簡分蔵）
2 雲紙本和漢朗詠集（二巻、宮内庁三の丸尚蔵館蔵）
3 関戸本和漢朗詠集（零本二巻、関戸家蔵。断簡分蔵）
4 北山抄巻三（一巻。前田育徳会蔵）
5 永承四年内裏歌合（十巻本歌合第三巻所収、国宝。前田育徳会蔵）
6 永承五年祐子（ゆうし）内親王歌合（十巻本歌合第五巻、前田育徳会蔵）
7 香紙法華経（八巻、穂久邇文庫蔵）
8 名家家集切（堤中納言集、零本一巻、宮内庁三の丸尚蔵館蔵。他五家集断簡、分蔵）

【第三種】

1 粘葉本和漢朗詠集（二冊、宮内庁三の丸尚蔵館蔵）
2 近衛本和漢朗詠集（下巻零本二巻、国宝、陽明文庫蔵。断簡四葉、分蔵）
3 伊予切和漢朗詠集（上冊・下冊六丁の断簡分蔵）
4 法輪寺切和漢朗詠集（断簡分蔵）
5 蓬莱切（五首複製。うち一首、五島美術館蔵）
6 元暦校本万葉集巻第一（零本二冊、国宝、東京国立博物館蔵。断簡分蔵）

成立年代と筆者

このうち、第二種と同筆の平等院鳳凰堂扉絵の色紙形（観無量寿経の経文）が、

(1)源豊宗〈一八九五―二〇〇一〉「鳳凰堂扉絵色紙形の題字の筆者に就いて」『仏教美術』第十八冊、昭和六年〈一九三一〉十二月、所収。

(2)伊東卓治〈一九〇一―八三〉「源兼行自筆書状」『国立博物館ニュース』七七号、昭和二十八年〈一九五三〉十月、所載。

により、大和守の源兼行〈―一〇二三―七四―〉の書と判明した。行成と並び称された能書僧延幹の子である。他の二人については、飯島春敬〈一九〇六―九六〉以降、第一種に行成の子の藤原行経[11]〈一〇一二―五〇〉、第三種に藤原公経（きんつね）〈―一〇五一―九九〉をあてる説などがあるが、未詳。ともあれ、源兼行が第二種筆者として揮毫に加わった高野切が十一世紀半ばのもので、『古今和歌集』の最古の写本であることが明らかになった。

紙面構成

いわゆる行書き（並列形式）で、詞書・作者・歌・左注（歌の左側に記された注）が規則正しく配列されている。具体的には左記のとおりだが、第三種が最も規則正しく、このことからも三人中、最も若書きであることが窺える。

【詞書】

歌より一～二字分下から書き、二行以上の時はアタマゾロエを原則とするが、第一種・第二種では終行を下げることもある。

【作者名】

第二種、巻第五―三〇二の作者「これのり」は詞書の下に書かれているが（19頁参照）、詞書の次行に低く配するのが原則。第一種では多字数の場合、紙高の二分の一より少し上から書くことがある。巻第一―一〇の作者「ふぢはらのことなほ」、同巻三〇番歌の作者「おふしかふちのみつね」、巻第九―四〇七の作者「をの、たかむらのあそん」、巻第二十―一一〇〇（巻末歌）の作者「ふぢはらのとしゆきの朝臣」である。

高野切第一種　仮名表

【歌】

短歌一首二行書きが原則だが、第一種・第二種の巻末や紙の継ぎ目の直前など、三行のところもある。すなわち、第一種では巻第一―六三・六五・六八（巻末歌、10頁参照）、巻第九巻末の四二一模写（22頁後掲）、巻第二十―一〇九九（巻末）の五首。第二種では巻第二―一三四（巻末歌、13～14頁参照）、巻第三―一六八（巻末歌、17頁参照）、巻第五―二九二（七紙末）・三〇九（十紙末）・三一二・三一三（十一紙・巻末歌）、巻第八―四〇五（巻末歌）である。

なお、第三種の巻第十九の旋頭歌四首はすべて三行に書かれている。

【左注】

詞書同様、歌より低くアタマゾロエが原則だが、第一種・第二種では二行目以下の行頭を順次下げることもある。

なお、左注と次の歌の詞書が並ぶ場合、左注を少し下げる。第一種では巻第一―七左注と八詞書、巻第九―四〇六左注と四〇七詞書、第二種では巻第五―二六九左注と二七〇詞書（19頁参照）、巻第八―三七五左注と三七六詞書の箇所である。

中谷正氏編『高野切第二種字典』（全一〇四頁）

書風の特徴

【第一種】

①整斉な仮名で、字母が少ない。

「お」「れ」ともに「於」とし、ム・モ両用の「ん」を一つとする数え方だが、字母数は百五。巻第九巻末の四二一番歌模写断簡所用の「茂」「舞」も加えて、[12]百七である。最多はハの「波」「者」「盤」「八」「半」の五字だが、一字母のみの音が十一もある。

②最初の横画が短く、それと交わる縦画が少ししか上に出ない。

③縦画の起筆が細く、しだいにふっくらした紡錘形になる。

④墨の潤渇の変化が美しい。

詞書・作者名・歌の初めでの含墨が多く、歌や詞書の途中でも、区切りのよい箇所で墨を継いでいることが看取される。主に一首二～三回の含墨で、最後まできれいに墨を伸ばす。

⑤行頭で字が大きくゆったり書き、行脚では字が小さく、字間がつまる傾向がある。

⑥平仮名「る」の結びが小さく、結ばずに「ろ」のように書いたところもある。

【第二種】

①字母数七十六と最少ながら、「き」「介」「春」「利」「遠」など、特異な字形を交用。

②「可」「曽」「め」など、終画を長く伸ばす字を多用（特に行脚）。

③右上から左下へ、息長く続く連綿線。

【第三種】

①端正な字形と平明な書きぶり。

②草仮名の意図的使用（巻十九・旋頭歌の二首など）。

③無理のない自然な連綿だが、第一種とは異なり、語句の区切りに則したものではない。

二、復元の方法

底本の選定

『古今和歌集』の流布本は、おしなべて藤原定家〈一一六二―一二四一〉の写本系統である。彼の日記『明月記』に「落字なきを以て悪筆の一得となす」と記された、古典校訂への信頼度による。が、高野切は十一世紀半ば、『古今和歌集』最古の写本で、奏覧本系統かとされるものであり、同一歌でも、高野切と現行刊本で語句に異同のあることもある。どの刊本を底本として高野切の復元に臨むべきか、大切な要素であり、高野切など古写本での表記が注記されたものを採用することを勧めたい。とりわけ、巻第二十の部類名を「雅」とし、壬生忠岑に後世転訛の前の「にぶのただみね」と振り仮名を付すなど、高野切での表記に重きを置く久曽神昇氏著『校注古典叢書古今和歌集』（一九八六年、明治書院）が最適といえる。

所用料紙

高野切は雲母砂子を撒いた麻紙系の料紙とされ、一紙は縦約二六・五センチ、横約五三センチである。慶雲四年〈七〇七〉の年紀を有する「王勃詩序」、天平三年〈七三一〉聖武天皇三十一歳の宸翰「雑集」をはじめ、高野切あたりまで用いられた麻紙ではあるが、以後、その製法は途絶えたようである。今日市販の高野切用料紙は、雁皮紙を薄茶色に引き染めし、雲母砂子を撒いたものである。

なお「紙面構成」の【歌】の項で前記したとおり、歌一首二行が原則の中で、たとえば第二種の巻第五―二九二・三〇九では三行になっているが、各々紙幅に留意すれば、第七紙末・第十紙末における紙面処理と理解できよう。巻十九の復元の項で触れるが、紙の継ぎ目を現存断簡と一致させつつ、原巻所用紙数を解明するためにも、前記寸法の紙を用いる必要がある。

歌中に漢字を交えない原則

歌中の漢字は、第一種では巻第一の八番歌所用の「日」と三二・四九番歌の「花」、四三番歌の「見て」の四字。第二種では巻第三―一六七の「花」、第三種では巻第十九―一〇四六の「人」と一〇六二番歌初字の「世中」のみである。ただ、これら漢字のうち「花」は三字とも行尾の小スペースへの対応であり、歌は仮名だけで書くほうが無難であろう。

詞書・作者・左注では漢字も交用されているが、特に「寛平」「承和」「貞観」「元慶」などの年号や「続日本（紀）」「僧正」などといった拗音の語は漢字で記されている。作者名では「遍照」の表記に留意したい。

字典の活用

第一種と第三種所用の単体・連綿・漢字を一冊にまとめた遙書房版や、第一種・第二種・第三種各々の同系統古筆も収めた雄山閣版などが刊行されている。いずれも利便ではあるが、高野切の全容を収めたものではない。また「書風の特徴」で既述したとおり、第一種では行頭で字が大きくゆったりとし、行脚では字が小さく、字間がつまる傾向があるため、字典所収の仮名やその連綿の、原本での位置を確認したうえで採用する必要がある。後掲の復元制作の方法は各自の創意に基づくが、オリジナルの字典によったものもあれば（4頁参照）、パソコンで字典をつくり、復元草稿を画面上で作成したものもある。

内題・奥題の表記と書体

般若心経等の経典の内題・竟題と同原理で、和歌集の写本としての古筆も内題を行書で丁寧に、尾題を行草体で簡略に記す、といった作法がある。高野切で両題が遺るのは次のとおりだが、内題は七巻中六巻で「倭歌」か「倭謌」と記している。復元では、こうした表記と書体に留意したい。

【内題】古今倭歌集巻第一・古今倭歌集巻第九・古今和歌集巻第二十（第一種）
古今倭歌集巻第二・古今倭謌集巻第三・古今倭謌集巻第五・古今倭歌集巻第八（第二種）

【尾題】巻第二十（第一種）巻第五・巻第八（第二種）巻第十八（第三種）

巻末の余白

源氏物語絵巻の竹河・橋姫（国宝。徳川美術館蔵）や伴大納言絵巻（三巻、国宝。出光美術館蔵）の詞書など、一群の書を遺す藤原教長（一一〇九―八〇）が世尊寺家七代伊経（一一六九―一二二七?）に授けた口伝をまとめた『才葉抄』に「物を人に誂てあるに、料紙のあまりたらんをば引放て不止也。料紙書余りて、不書して帰すは、手書の恥辱也」とある。実際、教長の書にかかる長谷切和漢朗詠集の上巻末の「仏名」では、白楽天と菅原道真の漢詩句を天地約二九センチの料紙に一行二～三字で、当時としては破格の大字で記されている。一方、高野切巻第二十の後奈良天皇の奥書は、本紙の余白への宸筆で、いわば紙中極めといえるが、それだけの余白があったということである。

要するに、巻末は広からず狭からず、ほどよい紙幅を残して筆を擱くのが、能書の心得であった。「紙面構成」の【歌】の項で記したとおり、第一種の巻第一―六三・六五・六八、巻第二十―一〇九九や模本ながら巻第九巻末の四二一、第二種の巻第二―一三四、巻第三―一六八、巻第五―三一二・三一三といった巻末での三行書は、そうした故実に則ったものである。巻第八では巻末近くの三首（四〇一～四〇三）の行間を接近させながら、巻末四〇五番歌は何事もなかったかのように、ゆったりと三行で締め括っている。

表紙と外題（題簽）

巻第二十の見返しに本文と同筆で「古今和歌集巻第二十」と行書で打付書きした題記が見えるが、これは原装の表紙を見返しに転用したことと知られる。また第二種の源兼行が揮毫した巻第五にも、第一種筆者の手になる「古今和歌集巻第五」の題簽が貼られている。江戸前期、原装の表紙をつけ替える際に、外題部分を切り取り、題簽として用いたとされるが、これにより二十巻すべての外題を、首座の第一種筆者が揮毫したと見てよい。巻子に雲母砂子を撒いた白紙の表紙をつけ、そこに外題を書くのが真の復元だが、耐用性のこともあり、次善法で巻第五と同様、緑系の裂（きれ）の表紙に題簽を貼ることを勧めている。なお内題と異なり「和歌」と記すべきである。

巻第五表紙（東京国立博物館編『書の至宝―日本と中国』二〇〇六年一月、所載）

三、高野切本古今和歌集 復元全巻の完成

高野切の復元は、巻第五・巻第八・巻第二十の完本三巻を除く十七巻を補うことだが、巻第五は重複揮毫されていた二七〇・二九八番歌の二首が割愛された形で伝わるため、これら二首を元の位置に戻さなければならない。[13]

つまり、十八巻を推定復元する必要がある。このうち巻第一・巻第二・巻第三・巻第九・巻第十九の五巻は多少の零本・断簡が伝存するが（3頁前掲表参照）、原本と同じ約五三センチ幅の料紙を用いて、散逸箇所を倣書で補いつつも、紙の継ぎ目を原本どおりに守る必要がある。巻第十八については、かつて完本であったときの転写本を模刻した江戸後期の版本があり、字母は現存断簡との対照で信じてよいものの、字形は第三種のそれと大きく異なっており、修整を要する。[14] その他十一巻は伝存皆無で、第一種・第二種・第三種の使用仮名を厳守しつつ、各々の書風で長巻に仕上げなければならない。

この至難の企図は、平成五年〈一九九三〉、当時修士課程学生であった手島和典氏（現・群馬県立前橋高校教諭）が巻第一に着手したことに始まる。同十四年夏までに成った復元六巻について報告したことがあるが、[15] 爾来十八年、本年一月に若松志保氏（鹿児島県立国分高校教諭）の七十首すべてを復元した巻第十七が成り、遂に全巻千百首が揃った。同じ巻を前後して二名が復元したものもあるが、毎年一巻ずつ復元を積み重ねてきたことになる。

ただ、復元後に原本や模写の存在が明らかになったものもある。例えば巻第二の九五・九六・巻末一三四番歌断簡や一三一番歌の模写、巻第九巻末歌の模写と見てよい断簡が出現した。今後はこれらについても修正しなければならないが、まずは十一世紀半ばの揮毫から千年、後奈良天皇が天文十三年〈一五四四〉三月十五日に巻第二十の巻末に識語を添えた直後に、豊臣秀吉から高野山の木食応其（興山上人）に巻第九が贈与されてからでも四百数十年ぶりに、全巻の様子がほぼ再現されたと言ってよく、平成二十三年〈二〇一一〉二月八日（火）から十三日（日）まで、記念に公開したものである。

それらは、巻第七の二・一メートルから巻第十九の約七・五メートルまで、一巻平均約五メートル。各巻一点としても、完本の複製も含め全長一〇〇メートルに及んだが、巻頭から巻末まですべて広げ、日本書道史・古筆学・書誌学・文学をも踏まえた、筑波大学書コースにおける真摯な学書の成果の一端を見ていただいた。

（二〇一一年、東日本大震災の春分）

〔注〕

1 久曽神昇「高野切古今集第一種」解説『書道全集』第十三巻（一九五五年、平凡社）一三三―一三五頁。

2 久曽神昇『古今和歌集成立論』（全四冊、一九六一年、風間書房）研究編一六六頁。同書資料編下二〇頁にも同様の記載。

3 春名好重編著『古筆大辞典』（一九七九年、淡交社）「高野切」項中、四〇八頁。

4 小松茂美『古筆学大成』第一巻（一九八九年、講談社）三三七頁。

5 増田孝「「高野切」の謎　巻五・巻二十の奥書をめぐって」『墨』一三七号（一九九九年四月、芸術新聞社）一〇八―一一一頁。

6 注4前掲。

7 『湯木美術館蔵品選集』（一九八七年、湯木美術館）解説一四八頁に図版所載。

8 前田正明「概説　木食応其―秀吉から高野山を救った僧―」特別展「没後四〇〇年　木食応其―秀吉から高野山を救った僧―」図録（二〇〇八年、和歌山県立博物館）五―一二頁、ほか。

9 田中塊堂「高野切の由来に就て」『武者の小路』第五年十二月号（一九四〇年十二月、武者の小路社）三〇―三四頁。なお当該文献については、橋本貴朗氏の教示を得た。

10 注4前掲書三四四頁。

11 飯島春敬『古筆名葉集解説』（一九三九年、七條書房）一―一七頁。

12 高城弘一「古筆と『古今和歌集』」新聞「大東文化」五五八号（二〇〇五年七月十五日）。同「古筆と『古今和歌集』」『大東書学』六号（二〇〇六年三月）。

13 小稿「古筆復元、原本再構築の試み」・橋本貴朗「「高野切古今和歌集」巻第五の2葉の断簡について」『書学書道史学会会報』六号（二〇〇三年九月）。ともに本書転載。

14 小稿「高野切古今集巻第十八の分割および九五六番歌断簡における改竄について」『書道研究一東』二一一号（一九九四年十月、一東書道会）一―一一頁。

15 小稿「高野切古今集復元の試み」『書の美』六号（二〇〇二年九月、日本書学研究会）二―一一頁。

〔付記〕

巻子の表装では、その都度、三上崇氏（神戸市・三上汲古堂）のお手を煩わせました。深謝申し上げます。

筒口直弘氏（芸術新潮）や同僚の鷺野谷秀夫氏が撮影して下さったものにつきましては、その旨明記しましたが、改めてお礼申し上げます。

また、本書を成すにあたり、修了直前の多忙の中、筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻・博士後期課程の尾川明穂氏の助力を賜りました。

巻第一・春歌上（第一種）　1～68番歌の68首中、40首半判明（含模写4首）

歌番号	所蔵者等	日本名筆選	日本名筆	古筆学大成	その他・備考
①1～3	五島美術館蔵（重文）	○	○	○	
②4	個人蔵 手鑑「浜千鳥」（重美）所収		○	○	
③6～8	三井記念美術館蔵	○	○	○	
④9・10	遠山記念館蔵	○	○	○	
⑤11（作者・歌一行目欠）	『栗山家入札目録』（昭和二年十月・東京美術倶楽部）所載			○	
⑥12・13	個人蔵「手鑑」所収	○	○	○	
⑦19～21	常盤山文庫蔵	○	○	○	
⑧25	前田育徳会蔵 手鑑「野辺のみどり」（重文）所収	○	○		
⑨28～32	個人蔵	○		○	
⑩33	書藝文化院刊『日本名筆全集3』（昭和二十九年）所載		○	○	右に蝶を描いた幅八ミリの紙を継ぎ、初行下半の八字を補筆
⑪41～44	サンリツ服部美術館蔵（重美）	○	○	○	
⑫46～49（50「だいしらず」抹消）	出光美術館蔵（重美）	○	○	○	村上翠亭「抹消された『高野切』」『大東書道研究』4号（一九九七年三月）
⑬55	春敬記念書道文庫蔵		○	○	
⑭57～60 模写	陽明文庫蔵「予楽院臨書手鑑」（重美）所収、他一点			○	村上翠亭・高城竹苞『近衛家熙写手鑑の研究』（一九九八年二月、思文閣出版）
⑮62～66（61歌二行目抹消、67詞書一行目抹消）	石橋財団石橋美術館蔵（重文）	○	○	○	村上翠亭「消された高野切」『美じょん新報』34・35合併号（二〇〇二年八月）
⑯68（尾題欠）	敬和会刊『夏かげ帖』上巻（大正十五年十月）等所載		○	○	

日本名筆選　……『日本名筆選』1（高野切第一種・二〇〇五年五月）・3（高野切第二種・二〇〇六年十一月）・5（高野切第三種・二〇〇五年一月）、各二版（増補）、二玄社。
日本名筆　……飯島春敬〈一九〇六―九六〉編『日本名筆』第一集一（高野切第一種）・二（高野切第二種）・三（高野切第三種）、一九七九年、書藝文化新社。
古筆学大成　……小松茂美〈一九二五―二〇一〇〉著『古筆学大成』第一巻、一九八九年、講談社。なお『古筆学大成』では、程度の差はあれ、縮小図版が多い。

断簡・零本（模写を含む）の番号の上を［で括った箇所は、本来連続していたことを示す。

手島 和典氏復元　平成六年〈一九九四〉　27首半復元　692㎝

右表中の⑤『栗山家入札目録』所載の一一番歌は「はるのはじめのうた／にぶのたゞみね／はるきぬとひとはいへどもうぐひすのなか／ぬかぎりはあらじとぞおもふ」の四行であったはずの二・三行目が欠失しており、一行目と四行目を継いだ二行の断簡。また⑭五七～六〇の四首は、近衛家熙〈予楽院・一六六七―一七三六〉の模書二点が伝わるものだが、字形、連綿はもちろん、墨継ぎの位置まで当初の姿を伝えていると見てよい。

よって、六十八首中、原姿をとらえることができるのは四十首半。判明率五九・六パーセントで、推定復元には四割の欠失部分を倣書で補う必要があるが、これを遂げたのが筑波大学芸術研究科修士課程二年であった手島和典氏（現・群馬県立前橋高校教諭）の平成五年〈一九九三〉度の修了制作。本紙全長六九二センチの長巻で、私の教室における本格的な古筆復元の魁となった。

倣書するだけでなく、それを原本の欠落部分に補わねばならない。すると必然的に、原本ととなり合った部分との文字や墨つぎに不調和が生じる。また全体の墨の配分も考えねばならない。そこで再度、文字と墨つぎの位置に手を加えた。線の表現も苦心した（後略）。

拙編『かな創作入門』（一九九三年、芸術新聞社）三九頁に、本巻の図版掲載かたがた寄せてもらった制作談の一部だが、これは復元巻制作者全員が体験したことである。

吉嶺 絵利（旧姓久留主）氏復元 平成十八年〈二〇〇六〉

27首半復元

690 cm

◀芸術新潮・筒口直弘氏撮影

1 2 3 4 5

臨　書　　倣　書

53 54 55 56 57 58

倣　書　　臨　書　　倣　書　　近衛家熙模本（前掲表⑭）臨書

64 65 66 67 68

臨　書　　倣　書　　臨　書　　倣　書

巻第二・春歌下（第二種）69～134番歌の66首中、39首半判明（含模写1首）

△…所載図版が断簡の一部である（歌数が少ない）ことを示す。

歌番号	所蔵者等	日本名筆選	日本名筆	古筆学大成	その他・備考
①69～73	個人蔵（手鑑「攢花」所収→軸装）	○		○	徳川美術館「古今和歌集の世界」展（二〇〇五年一月四～三十日）展示
②76（詞書一行目欠）・77	個人蔵	○	○	○	
③78	個人蔵			○	
④90・91	梅沢記念館蔵	○	○	○	
⑤92	書藝文化院刊『日本名筆全集3』所載		○	○	『古筆学大成30』・補遺図版（一九九三年十一月）
⑥93・94	個人蔵			○	
⑦95・96	石水博物館蔵（重美）	○			同館編『川喜田半泥子の眼―その作品と愛蔵品から―』（二〇〇〇年十月）
⑧100・101	飯島春敬『古筆名葉集』（昭和十四年）等所載		○	○	
⑨102（上の句欠）～104	個人蔵			○	
⑩105～109	五島美術館蔵	○	○	○	
⑪115～117	個人蔵		△	○	『日本名筆』は117詞書まで
⑫118・119	尚古会刊『高野切複製』所載（119個人蔵）		△	○	『日本名筆』は119のみ。香雪美術館「書の魅力―床飾りとともに」展（前期・二〇一〇年九月十六日～十一月十四日）展示。『古筆学大成1』は上記模本
⑬120	北村美術館蔵	○		○	
⑭121	春敬記念書道文庫蔵		○	○	
⑮124	陽明文庫蔵（重美）	○	○	○	
⑯125	サンリツ服部美術館蔵	○	○	○	
⑰127・128	三井記念美術館蔵 手鑑「高窠（たかまつ）帖」（重文）所収	○	○	○	
⑱131 模写	西尾市岩瀬文庫蔵「古墨蹟写」（「墨蹟帖」）所収				松本文子「西尾市岩瀬文庫の古筆透写本より―「高野切第二種」と頓阿『風雅和歌集』―」『鶴見日本文学会報』61号（二〇〇七年九月）、同「【資料紹介】西尾市岩瀬文庫所蔵『芳翰模彙』・『古墨蹟写』」『鶴見日本文学』12号（二〇〇八年三月） 森岡隆「「高野切古今集」巻二―一三一番歌模写断簡出現の意義」『書の美』75号（二〇〇八年六月、日本書学研究会）
⑲132	京都国立博物館蔵 手鑑「藻塩草」（国宝）所収	○	○	○	
⑳133	石山寺蔵				同寺編『石山寺 宝物篇』（一九七二年〔単色〕、一九九二年改訂版〔原色〕）
㉑134（尾題欠）	個人蔵	○			徳川美術館編『彩られた紙 料紙装飾』（二〇〇一年十月）

中谷 正氏復元　平成十一年〈一九九九〉　30首半復元（復元当時35首半判明）　536cm

▶芸術新潮・筒口直弘氏撮影

巻第二巻末・一三四番歌復元第二案

古筆復元、原本再構築の試み

森岡　隆

中谷正氏　高野切巻二復元（部分）

高野切巻二巻末断簡
（徳川美術館編『彩られた紙　料紙装飾』所載）

明治四四年創刊の『書苑』あたりに始まる科学的な考究を受け、「古筆学」を提唱したのは飯島春敬（一九〇六～九六）で、昭和一四年の著『古筆名葉集』別冊解説の序文でその必要を説き、本論でその方法論を実践したのであった。藤原伊房・定実父子の書の確定・推定や、高野切第一種の藤原行経筆者説なども、この著に始まったもの。現今では小松茂美先生の『古筆学大成』など、古筆の網羅把握・研究が進んでいる。

しかし、それらの大半は長い伝来の途次、零本や断簡となってしまったもの。そこで私の教室では、使用仮名とその頻度、連綿や散らし書きの特徴、料紙や装丁などを踏まえ、臨書で培った技法を駆使しつつ、欠失部分を倣書で補う「復元」を奨励している。伝本系統の理解も必要ではあるが、写本ごとに歌序や語句の異同が指摘されるのであってみれば、流布本の刊本を底本とせざるを得ない。ただ、主要古筆での表記が注記されたものや、古筆研究者校訂のものを採用することを勧めている。

ともあれ、本阿弥切巻十一・十二・十六、関戸本古今集巻四・二十、法輪寺切巻下、針切重之の子の僧の集、伝西行筆小色紙、名家家集切本堤中納言集、寸松庵色紙の見聞き復元、などの復元がなされてきている。高野切でも巻一・二・九・十八・十九に加え、伝存皆無の巻十・十四の復元も完成し、完本の巻五・八・二十と合わせて十巻揃ったことになる。

が、こうした復元後に原本が出現することもある。たとえば、中谷正氏が平成一一年春、高野切巻二の復元巻を修了制作として提出した直後の一三年秋、その巻末断簡が出現。第二種では巻三・五・八の巻末歌がいずれも三行で、巻二もその蓋然性が高いことを推知しつつ、五三〇センチの長巻の第一〇紙が数センチ足りず、やむなく二行にまとめたのだが、案の定、新出断簡は三行。また、原本には詞書の「はるの」がなく、歌の初句も「けふとのみ」という異同。とはいえ、右記「はるの」を除く調書と歌、計四九字中三六字が原本と同字。つまり四分の三が原本どおりなのである。第二種の字母数が少ないとはいえ、これは非常な高率。

というのは、第二種筆者の源兼行自身、うっかり一巻中に同一歌を二度書いたところが二箇所あり、その二組とも用語・用字など、完全には一致しないからである。すなわち巻五―二七〇と二九八。江戸時代前半に巻五の第四紙と第八・九紙にまたがる両紙から切り取られた重複歌が、各々手鑑「世々の友」と「毫戦」に押されている。なお、これについては橋本貴朗君が検証してくれ、札幌大会で発表することになっている。

原色図版なき時代、田中親美（一八七五～一九七五）複製の恩恵を蒙ったように、古筆の復元が原本再構築に寄与することもあろうかと思う。

「書学書道史学会会報」6号（二〇〇三年九月）

「高野切古今集」巻二―一三一番歌 模写断簡出現の意義

森岡　隆

131　西尾市岩瀬文庫蔵『古墨蹟写』所収

132　京都国立博物館蔵手鑑「藻塩草」（国宝）所収

133　『石山寺 宝物篇』所載

134　徳川美術館編『彩られた紙 料紙装飾』所載

平成に入り、小松茂美氏の大著『古筆学大成』（一九八九～九三年、講談社）や伊井春樹氏編『古筆切資料集成』（一九八九～九三年、思文閣出版）など、古筆の把握が進展しており、高野切古今集でも断簡出現の報に接する。[1] 稿者は平成十四年〈二〇〇二〉九月の時点で、第二種の巻三を除き、右の両書未収のものも含め、把握し得た高野切の断簡を一覧で掲げ、[2] 完本の巻五（国宝）と別に伝存する重複二首のうち、その事情が詳らかでなかった二九八番歌（手鑑「毫戦」所収）について、橋本貴朗氏とともに、第八～九紙にまたがる両紙から切除されたことも実証した。[3] が、以後の知見にかかるものもある。

本稿に関わる第二種では、平成十二年に巻二―九五・九六の二首幅（重要美術品。石水博物館蔵）が公開されていた。[4] 手鑑「攢花」所収であった同巻巻頭の六九～七三の五首が、[5] 軸装に改められたことも明らかになった。[6] そしてまた、西尾市岩瀬文庫蔵『古墨蹟写』（一冊。登録書名「墨蹟帖」）所収の巻二―一三一の模写断簡の存在が明らかにされた。[7] 松本文子氏の報告と、マイクロフィルム一括を閲しつつ、概要を見ておきたい。

本冊は薄い雁皮紙を袋綴じ（朝鮮綴じ＝五つ目綴じ）したもので、一頁の縦横は三四・八×二四・六センチ。黄の型押表紙に打付書きで「古墨蹟写」の外題、裏表紙の中央下半には「高木有條持」の墨書。表裏が行草体と楷行で書体が異なるが、能書の堂々とした書きぶりで、指摘どおり同筆と見てよかろう。有條の伝は未詳だが、同文庫には『徒然草』の十二の段を題材とした「つれづれ草画巻物」など、有條が天保六年〈一八三五〉ころに写した画巻が数点所蔵されているという。

見返しには異筆で所収断簡の筆者名が十一段、二十七行に記され、以後、本紙半丁ごとののどに「弐」から「三百六」までの頁数が付されている。が、末尾にもう一丁あり、その表である三〇七頁には、『新後拾遺和歌集』巻一の巻頭歌を散らし書きした尊朝法親王〈一五五二―九七〉の書が写されている。ただ一七八～一七九頁の一丁は切除されている。他の二か所の切除も含め、見返しでは、内容どおりに筆者名が連続して記されていることから、見返しは、切除して綴じた後で記されたのであろう。なお五六頁までの見開き中央には、朝倉茂入（初代・二代）所用印の模刻と指摘される「拝」黒文印が割印されている。

内容は、伝聖武天皇宸翰で「大聖武」などと称される賢愚経の断簡四行（七〇頁）等の書跡約三百点で、天宝十一年〈七五二〉の顔真卿の多宝塔碑の首尾や（一六八～一六九頁）、米元章の「照寧丙辰〈一〇七六〉春」の年紀を有する書もある（二七四～二七五頁）。

模写の過程を示すのが、半丁（一頁）に一字ずつ隷書を大書した東明心越・江月宗玩・石川丈山・小堀遠州・小堀政尹の書で（三四～三九頁、四四～四五・二三八～二三九頁、五一～五三頁、五五頁、二二二頁）、いずれも籠字となっている。翠巌宗珉の円相（六四頁）、池大雅の行書と大徳寺天祐の行草（一三〇～一三七頁、一八四～一八六頁）、また一頁に「黒漆」の二字を写した江月宗玩の行草書でも同様で（二五六頁）、前述の三〇七頁、二条為定〈一二九三―一三六〇〉の和歌の初句「天津空」でも籠字の「天」を抹消し、すぐ左に墨書した「天」が添えられている。小字のものは籠字にとることはなかったであろうが、精度の高さを推知することができる。一丁に一字ずつ大書した「影向間」についても（二一〇～二一五頁）、「空海御筆」（目次は「弘法大師」）とする伝称は誤りとしても、原本の字形は忠実に写しているのであろう。

これらには極札等の写しも添えられている。松本氏の指摘どおり、古筆本家代々のものが主で、中でも第九代了意〈一七五一―一八三四〉のものが多い。そのうち蘭渓道隆の五言絶句の墨跡を写した左に「古筆了意先生折紙

有リ」と記されていることから（二九頁）、了意に師事した者が関わったことが窺える。外題を揮毫し、所持していた高木有條との関係などは詳らかでないが、冷泉為恭〈一八二三―六四〉の書の写しも所収されていることから（一〇〇・一九〇・二〇八頁）、幕末から明治初年にかけての成立かと思われる。

なお巻頭（二頁）に「紅梅合に／うぐひすのすをくひ／わぶるむめの花／誰かにほひも／おしくをも／はむ」（濁点稿者、以下同様）と読める縦長の色紙形が収められている。二・四・五句が流布本と異なるが、藤原高光集所収歌と見てよい。古筆家第七代了延〈一七〇三―七四〉の紀貫之筆とする極札の写しも添えられているが、貫之〈八七〇頃―九四五〉が高光〈九四〇頃―九九四〉の歌を書くことはできない。また「おしく」は定家仮名遣いとしても、「をもはむ」の表記は誤りである。

これと同一の模刻が、架蔵の『紀貫之朝臣真蹟帖』に所収されているが、終句の「を」（越）が「も」（茂）に似た形であるのは措くとして、二句目末字の「る」（類）が虫損を示すように不鮮明である。原本が虫損を受けていない時に『古墨蹟写』の模写がなされ、その後『紀貫之朝臣真蹟帖』の模刻がなされたことを示していよう。紀貫之筆と伝称された古筆を所収する同帖は精度の高い模刻本だが、所収古筆や排列の異なる数種の版本がある。いずれも刊記がなく、鵜南や古雪斎と号した畑成文の漢文識語が添えられるのみで、その伝も未詳。が、明治年中、京都博物館の鑑定議員を務めたようで[8]、同十八年〈一八八五〉までは健在であった。「滄海遺珠　正三位有功」の題字から、千種有功〈一七九七―一八五四〉が同位に就いた天保三年〈一八三二〉以降であることは確かで、また数次にわたって版行されたのであろうが、編者の活動時期も含め、絶版は明治半ばまで下げてよいと思われる。

さて『古墨蹟写』の二六二頁が高野切第二種、巻二―一三一の模写である。のどに「紀貫之朝臣寛平のおほむときの　切　庚辰九　了珉札有也」と記されているが、裏書の干支から、古筆家第五代了珉〈一六四五―一七〇一〉晩年の元禄十三年〈庚辰・一七〇〇〉九月の極札が添えられていたことを伝えている。そして、縦約二六センチ、横約一〇センチの矩形内に、

寛平のおほむときのきさいのみや
のうたあはせのうた
ふぢはらのおきかぜ
こゑたゝずなけやうぐひすひとゝせに
ふたゝびとだにくべきはるかは

と写されている。初句が流布本の「こゑたえず」と異なるが、元永本古今集等と同様である。原本筆者の源兼行〈―一〇二三―七四―〉の使用字母は八十弱と少なく、同じ語はほぼ同様に書く傾向が看取されるが、この詞書と作者名も、二行目下方の「う」の字源が「宇」か「乎」かは措くとして、同じ巻二の一〇一番歌や巻五―三〇一の当該箇所と瓜二つ。墨継ぎ箇所や行の傾斜は一考を要するが、二句目の「ふ」（不）のように見える「く」の形も、四句目の「ふ」（不）から「た」への踊り字のような連綿も、ほぼ原本の姿を伝えていよう。

直後の一三二番歌は手鑑「藻塩草」（国宝。京都国立博物館蔵）の所収で（一一五＝裏8）、一三三番歌（石山寺蔵）[10]、一三四番歌も真跡が伝存する[11]。これら模写断簡以下の四葉を接続すると幅約四五センチとなるが【図】、巻五・巻八・巻十八・巻二十と同様、巻末一三四番歌の左には「巻第二」と奥題があったはずで、その左にも少しく余白があったであろう。それも含めて当初の巻末一紙分（約五三センチ）であったと思われる[12]。表裏に二四二葉もの古筆を整然と配した「藻塩草」は古筆家本家に伝来し、鑑定台帳として用いられたと指摘される。この『古墨蹟写』も同家との関連が窺えるものであり、当初一連であった一三一・一三二番歌断簡を同家で二分し、字形や連綿に不全な箇所のない後者を「藻塩草」に押したと見るのは迎えすぎであろうか。

朗報に謝しつつ図版を掲載し、この模写断簡出現の意義大なることを一言した。西尾市岩瀬文庫と松本文子氏にお礼を申し上げる。

1 巻九―四一二が所収される手鑑「かりがね帖」（重要文化財。文化庁蔵）、同巻巻末四二二の写しと見てよい断簡、巻十九―一〇五一・一〇五二（軸装。三井記念美術館蔵）など。
2 小稿「高野切古今集復元の試み」『書の美』六号（二〇〇二年九月）。
3 同右および小稿「古筆復元、原本再構築の試み」『書学書道史学会会報』六号（二〇〇三年九月）。橋本貴朗「「高野切古今和歌集」巻第五の2葉の断簡について」第十四回書学書道史学会大会発表資料（二〇〇三年十月十一日）。
4 平成十二年〈二〇〇〇〉十月六日から十一月五日まで、石水博物館で開催された石水会館七十周年記念特別展で展示。同展図録『川喜田半泥子の眼―その作品と愛蔵品から―』（二〇〇〇年）所載。同館学芸員の龍泉寺由佳氏のご教示による。
5 小松茂美『古筆学大成』第二十六巻（一九八九年、講談社）五九八頁。
6 平成十七年〈二〇〇五〉一月四日から三十日まで、徳川美術館における「古今和歌集成立一一〇〇年記念　古今和歌集の世界展」で展示。
7 松本文子「西尾市岩瀬文庫の古筆模写本より―「高野切第二種」と頓阿『風雅和歌集』―」『鶴見日本文学会報』六一号（二〇〇七年九月）、同【資料紹介】西尾市岩瀬文庫所蔵『芳翰模彙』・『古墨蹟写』」『鶴見日本文学』一二号（二〇〇八年三月）。
8 小松茂美『古筆学大成』第二十九巻（一九九三年、講談社）二四六―二四七頁。
9 村上翠亭「つれづれ紙撚切」『大東書道研究』一一号（二〇〇三年六月）。小稿「寸松庵色紙の伝存点数および改竄の一端」『書学書道史研究』一四号（二〇〇四年九月）五八―五九頁。
10 石山寺編『石山寺　宝物篇』（一九七二年、一九九二年改訂版）に原色図版所載。
11 徳川美術館編『彩られた紙　料紙装飾』（二〇〇一年十月）二〇頁、図版一四。注（2）（3）前掲小稿。
12 中谷正氏の高野切巻二復元巻（一九九九年三月、筑波大学大学院修了制作）参照。

『書の美』75号（平成二十年〈二〇〇八〉六月、日本書学研究会）

歌番号	所蔵者等	日本名筆選	日本名筆	古筆学大成	その他・備考
①135（左注欠）	飯島春敬編『わかたけ帖』（昭和二十七年五月）等所載		○	○	
②136（詞書欠）	個人蔵	○	○	○	
③138	個人蔵	○	○	○	
④142	『にしき木』（明治四十四年十一月）所載				
⑤144	川崎市市民ミュージアム蔵手鑑「披香殿」所収	○			
⑥147	『高野切第二種（乙）』（昭和十四年九月、武田墨彩堂）所載		○	○	『日本名筆』は148と接合掲載
⑦148	個人蔵	○	○	○	
⑧152模写	久曽神昇氏蔵				同氏『古今和歌集成立論』研究編（一九六一年十月、風間書房）等所載「高野様切」
⑨157・158	田中親美編『なつ山』（明治四十四年十月）所載		○	○	上記書では歌序を換え、初句「なつやまに」の158を巻頭配置
⑩159	永青文庫蔵手鑑「墨叢」所収	○		○	『古筆学大成1』は上記書転載
⑪167（詞書欠）	徳川美術館蔵手鑑「鳳凰台」所収	○	○	○	
⑫168（尾題欠）	三井記念美術館蔵	○			同館編『美の伝統三井家 伝世の名宝』（二〇〇五年十月）

右表の⑧は、久曽神昇氏の平成七年〈一九九五〉の著『古筆切影印解説 I古今集編』に「金砂子と雲母が蒔いてあり、高野切より明るく見える」（解説三一五頁）と記されたものだが、高野切の当該歌の模写と見てよい。初句が流布本「やよやまて」と異なることについては、「初句「やよまて」は他に全く無く、音節数からも誤脱と思われる」とあるが、二句目の「やまほとゝぎす」の初字も「や」であるために生じた誤脱であろう。いずれにせよ、原本で誤脱があったわけで、復元ではそのまま書くべきであろう。

ただ、これを早く掲載した昭和三十六年〈一九六一〉の『古今和歌集成立論』研究編で「高野様切」と命名し（一八一頁・第一〇四図）、『古筆切影印解説』でも久曽神氏自らしたためた極札「紀貫之高野様切金砂子蒔」が添えられているにもかかわらず（影印四頁・第二図）、同書で「日向切」と表記したのは、何らかの誤りであろう。春名好重〈一九一〇―二〇〇四〉編著『古筆大辞典』（一九七九年）でも「高野様切」として解説されており、第一種の巻第一―九・一〇断簡（遠山記念館蔵）の後半一首の模写と解される日向切との混同は避けたい。

⑨の『なつ山』巻頭所載図版では一五八・一五七という配列になっているが、これは一五八番歌の初句「なつやまに」にちなんだ書名とする意図に基づいての改変であり、復元に際しては、『日本名筆』所載図版のとおり、歌序に従うべきである。

また、⑩一五九番歌「よみびとしらず／こぞのなつなきふるしてしほとゝぎす／それかあらぬかこゑのかはらぬ」では、二行目と三行目の間で紙が継がれている。三紙と四紙の継ぎ目として守り、復元を遂げたのが、次頁掲載の高橋佑太氏である。

髙橋 佑太氏復元　平成十七年〈二〇〇五〉　21首復元　278cm

135　臨書　136　臨書　137　倣書　138　臨書　139　倣書　140　倣書　141　倣書　142　臨書

163　倣書　164　倣書　165　倣書　166　倣書　167　臨書　168　倣書

巻第四・秋歌上（第二種）

169〜248番歌の80首、伝存皆無

倉持 宗起氏復元 平成二十一年〈二〇〇九〉 全首復元 583cm

（鷲野谷秀夫氏撮影）

巻第五・秋歌下（第二種）249～313番歌の65首完本（国宝、個人蔵）切除された270・290の重複二首を復元配置（『日本名筆選3』所載図版）

「高野切古今和歌集」巻第五の2葉の断簡について

橋本貴朗

「高野切古今和歌集」巻第五は完本として知られる。しかし、その完本とは別に、巻第五所収の270番歌が記された断簡と298番歌が記された断簡の存在も知られている。

従来、この2葉の断簡については、大別すれば、現存する「高野切古今和歌集」巻第五から切り取られたものとする説と、現存する「高野切古今和歌集」巻第五とは別の副本の残存部とする説との、ふたつの説がある。

本発表は、この2葉の断簡が現存する「高野切古今和歌集」巻第五から切り取られたことを明らかにし、そのうえで「高野切古今和歌集」巻第五の本文の特質におよぶことを目的としたい。

問題解明のうえで発表者が着目するのは、「高野切古今和歌集」巻第五の料紙上部に規則的にならんでみえる虫食いである。この虫食いは軸芯に近づくにつれて間隔が狭くなっており、巻子本である「高野切古今和歌集」巻第五が巻かれている状態のときにできたものとおもわれる。また、2葉の断簡の料紙上部にも虫食いを確認することができる。これらの虫食いの検討によって、270番歌が記された断簡は268番歌と269番歌との間から切り取られたこと（飯島春敬「伝紀貫之筆高野切第二種巻五」『日本名筆全集』第四期巻三（書芸文化院・1962））、298番歌が記された断簡は299番歌と300番歌との間から切り取られたこと（森岡隆先生の御示教による）を明らかにし、あわせて原装の復元を試みたい。切り取られた時期についても、江戸時代につくられた模刻本との比較によって、その下限を明らかにしたい。

「高野切古今和歌集」巻第五の歌の排列には奏覧本系統の本文としての特質が指摘されている（久曽神昇『仮名古筆の内容的研究』（ひたく書房・1980））。しかし、この指摘は現状の排列に即してなされたものであり、発表者の復元する原装における排列はそれとは異なる。この点についても考察を加えたい。

「書学書道史学会会報」6号（二〇〇三年九月）

(320) 319 318 317 316 315 314

古今倭歌集巻第六

冬哥

たゝ[illegible]れ　よみひと[illegible]

[illegible]

[illegible]

334 333 332 331 330 329

[illegible]

342 341 340 339

[illegible]

巻第六・冬歌（第二種）　314～342番歌の29首、伝存皆無　高橋 佑太氏復元　平成十九年〈二〇〇七〉　全首復元　265㎝

348　347　346　345　344　343

古今後歌集巻第七

賀歌

364　363　362　361　(360)

巻第七

巻第七・賀歌（第二種）　343〜364番歌の22首、伝存皆無　橋本 貴朗氏復元　平成十九年〈二〇〇七〉　全首復元

214.2 cm

巻第九・羈旅歌（第一種）406～421番歌の16首中、8首判明（含模写1首）

歌番号	所蔵者等	日本名筆選	日本名筆	古筆学大成	その他・備考
①406	湯木美術館蔵（重文）	○	○	○	
②407（詞書一行目欠）	個人蔵		○	○	
③412	文化庁保管 手鑑「かりがね帖」（重文）所収		○	○	出光美術館編『書の名筆〈三色紙〉とちらし書き』（二〇〇四年十一月）
④417 詞書	手鑑「筆陳」所収	○	○	○	植村和堂〈一九〇六―二〇〇二〉旧蔵
⑤417・418 詞書	MOA美術館蔵 手鑑「翰墨城」（国宝）所収	○	○	○	
⑥418（作者欠）	春敬記念書道文庫蔵		○	○	
⑦419（詞書欠）・420	個人蔵	○		○	徳川美術館編 六十周年展図録『かな―王朝のみやび―』（一九九五年九月） 高城弘一「古筆と『古今和歌集』」新聞「大東文化」558号（二〇〇五年七月） 同「古筆と『古今和歌集』」『大東書学』6号（二〇〇六年三月）
⑧421 模写（尾題欠）	高城弘一氏蔵				

⑧巻第九巻末・四二一番歌模写断簡

④～⑥の断簡は、切断箇所が何とも不自然である。四一七・四一八ともに詞書と歌の間で分割されたのはともかく、この四一七の作者名・歌の三行の後に、次歌四一八の詞書七行が連なっているのである。分割に際して何行ずつ所持するかという区切りもあり、古筆切によくあることではあるが、四一八番歌の詞書を四一七番歌の左注と見誤った可能性もあろう。

ともあれ、林信賢（のぶたか）氏が平成十年〈一九九八〉の卒業制作で料紙六枚に復元した当時は⑦までが確認されており、歌数だけで言えば伝存率四三・八パーセント。復元すべきは一巻中の過半とはいえ九首ながら、四一〇・四一一両歌の詞書が長文で、容易ではなかった。

その後、平成十七年に右表⑧の存在が明らかになった（上図参照）。「素性法師／たむけにはつゞれるそで□□□／べきをもみ[ぢ]にあ[け]るかみや／かへさむ」と読め

林 信賢氏復元　平成十年〈一九九八〉　9首復元（復元当時7首伝存）

312.4 cm

るが、「たむけ」や「かみ」が直前の四二〇番歌の同語と近似しており、作者名や二行目の「礼」、三行目末の「や」などの字形も、第一種の特徴をよく示している。二行目末の空白箇所は、原本断簡の渇筆であったところがいよいよ薄くなり、判読できなくなっていたのであろうか。あるいは転写本であろうか。いずれにせよ、この箇所が流布本と同様としても二・三句目は「つゞれるそでもきるべきを」となり、流布本の「つゞりのそでもきるべきに」と異なるが、これは巻第一―二の四句目「はるがたけふの」（流布本「春立つ今日の」）、三番歌の二句目「たゝるやいづこ」（同「立てるやいづこ」）など、同じ第一種に限らず、高野切の他の歌でも散見されることである。

歌が三行であるのも、前記「紙面構成」で確認した巻末歌の特徴に合致しているが、「書風の特徴」の項で触れたとおり、「茂」と「舞」は現存する第一種に用例がない。が、同系統の深窓秘抄や関戸本古今集等と同様、巻末歌ゆえ草仮名が多用されたのであろう。後述のとおり第三種の巻第十八でも、転写模刻本によって現存断簡・零本にない「裳」が用いられていたことが明らかになり（34～35頁参照）、巻第十九でも「愛」の用例が確認されたのであってみれば（36・38頁参照）、右の二字もそのまま用いてよいであろう。

なお継色紙でも、平成十六年〈二〇〇四〉に新出で重要文化財に指定された「恋一　よしのがはいはなみたかくゆく水のはやくぞひとをおもひそめてし」（『古今和歌集』巻第十一・恋歌一―四七一）の一首により、従来知られていた三十三首半では未使用の「素」がソの仮名として用いられていることが判明したことであった（東京国立博物館編『書の至宝』二〇〇六年一月、図87・一八八―一八九頁）。

巻第十・物名（第一種）　422～468番歌の47首、伝存皆無　手島 和典氏復元　平成十五年〈二〇〇三〉　全首復元　462.7cm

426 427 428 429 430 431 432

455 456 457 458 459 460

中村　裕美子氏復元　平成二十二年〈二〇一〇〉　全首復元

477 cm

422 423 424 425 426

436 437 438 439 440 441

464 465 466 467 468

巻第十一・恋歌一（第一種）469～551番歌の83首、伝存皆無　中溝 朋美氏復元　平成十八年〈二〇〇六〉　全首復元　532cm

巻第十二・恋歌二（第一種）552～615番歌の63首、伝存皆無　髙橋 智紀氏復元　平成二十二年〈二〇一〇〉全首復元

474.7 cm

巻第十三・恋歌三（第三種）　616～676番歌の61首、伝存皆無　若松 志保氏復元　平成十八年〈二〇〇六〉　全首復元

474.8 cm

巻第十四・恋歌四（第三種）　677～746番歌の70首、伝存皆無　楠山 美智子（旧姓長内）氏復元　平成十二年〈二〇〇〇〉　全首復元　533cm

(684)　683　682　681　680　679　678　677

733　732　731　730　729　728　727　726　725

746　745　744　743　742

749 748 747

古今俄歌集巻第十五

恋歌五

802 801 800 799 798 797 796 795

822 823 824 825 826 827 828

巻第十五・恋歌五（第三種）　747～828番歌の82首、伝存皆無

成田真理子（旧姓塩川）氏復元　平成二十年〈二〇〇八〉　全首復元

626cm

巻第十六・哀傷歌（第三種）

829〜862番歌の34首、伝存皆無

油田 望花氏復元　平成二十一年〈二〇〇九〉　全首復元

430 cm

(833)　832　831　830　829

(841)　840　839　838　837　836　835　834

862　861　860　859　858

▲ 鷺野谷秀夫氏撮影

巻第十七・雑歌上（第三種）

863〜932番歌の70首、伝存皆無

若松 志保氏復元 平成二十三年〈二〇一一〉 全首復元

722.5 cm

▲ 芸術新潮・筒口直弘氏撮影 ▼

巻第十八・雑歌下（第三種）933～1000番歌の68首中、40首判明（含模写4首）

歌番号	所蔵者等	日本名筆選	日本名筆	古筆学大成	その他・備考
①938（詞書欠）・939	個人蔵			○	
②940～942	逸翁美術館蔵手鑑「谷水帖」（重文）所収	○	○	○	
③948～950	徳川博物館蔵「大手鑑」所収	○	○	○	
④951～953	個人蔵	○	○	○	
⑤956（改変）	徳川博物館蔵（詞書＝「大手鑑」所収、作者・歌＝掛幅）	○	△	○	森岡隆「高野切古今集巻第十八の分割および九五六番歌断簡における改竄について」『書道研究一東』211号（一九九四年十月）。『日本名筆』は詞書のみ
⑥957	個人蔵（重美）			○	
⑦963（詞書欠）～967	株式会社ヤマタネ蔵（重文）	○	○	○	
⑧968詞書（一・二行頭八字）	久曽神昇氏蔵				同氏『古筆切影印解説Ⅰ古今集編』（一九九五年七月）
⑨968（詞書欠）～970	吉田知光編『日暮帖』（大正十一年六月）等所載		○	○	『古筆学大成1』は模本
⑩971詞書	個人蔵「手鑑」所収		○	○	
⑪977（詞書一行目欠）	春敬記念書道文庫蔵			○	
⑫978～980（981詞書・作者抹消）	藤田美術館蔵（重文）	○	○	○	村上翠亭「古筆の鑑賞―僻目のすすめ―」『大東書学』4号（二〇〇四年三月）
⑬982	静嘉堂文庫美術館蔵	○		○	
⑭983・984	香雪美術館蔵	○		○	
⑮985	敬和会刊『夏かげ帖』上巻（大正十五年十月）等所載		○	○	
⑯986・987	個人蔵（現存は986詞書欠）	○	○	○	⑤前掲 森岡稿。『日本名筆選』は現存分
⑰991	個人蔵手鑑「まつかぜ」所収	○		○	古筆学研究所編『水莖』30号（二〇〇一年三月）
⑱992（詞書欠）・993模写	狩野探幽模写「古筆歌切」所収			○	小松茂美〈一九二五―二〇一〇〉旧蔵
⑲994模写（だいしらず欠）	個人蔵			○	
⑳995模写	個人蔵手鑑「歌海」所収			○	
㉑997～1000	個人蔵（重文）	○	○	○	

△…所載図版が断簡の一部である（歌数が少ない）ことを示す。

倣　書（『貫之卿筆古今和謌集 第十八』準拠）

臨　書　　倣　書（『貫之卿筆古今和謌集 第十八』準拠）

巻第十八・雑歌（流布本では雑歌下）は九三三～一〇〇〇の六十八首。このうち図版で確認できる断簡は、前掲表のとおり二十一点。中には⑩のように詞書だけが伝存するものもあれば、①など詞書を欠く断簡もある。また⑱～⑳は模写本だが、墨継ぎの位置はともかく、造形は信じてよいもの。よって、何とか原姿をとらえることができるのは、歌数四十首分。判明率五八・八パーセントである。

この巻第十八については、同巻の転写本を模刻したと思われる『貫之卿筆古今和謌集第十八』（袋綴装。十九丁＝三十八頁）があり、桑田笹舟〈一九〇〇―八九〉著『笹舟かな教室　基礎下』（一九七五年・内山松魁堂）一五六～一六五頁に全容が収載されている。奥書に記された「皇都　寺町通本能寺前　銭屋惣四郎」は宝暦九年〈一七六〇〉以降、明治期の四代目まで歴代が継いだ名ながら、文政年間〈一八一八～三〇〉あたりに板行されたものであろうか。ともかく、これを前掲表の現存断簡等と対照するに、字形が拙く、連綿にも若干の相違がある。また木版本のこととて、墨継ぎ箇所を伝えるものでもない。しかし、使用字母と書写形式（行立て）はまったく同じで、原本を窺うのに十分な資料である。

とすれば、同書の九五四番歌初句所見の「濃（の）」（左頁中図）、九八一番歌初句所見の「散（さ）」も、同じく第三種・巻第十九の旋頭歌を草仮名で書いた一首目に用いられていることから、信じてよいであろう（38頁・一〇〇七番歌図版参照）。また九七三番歌左注の末字「布（ふ）」も、第三種と同筆の粘葉本和漢朗詠集等に見ることができる。現存

臨　書　　倣　書　　臨　書

（『貫之卿筆古今和謌集 第十八』準拠）

（三頁分を接続）

断簡でも③の九四九番歌冒頭に、草仮名といえる「餘」、後掲の巻十九⑨の一〇六四番歌初字に「美」が交用されている。

しかし、九六一番歌初句所見の「裳」は、第三種の同筆古筆群にも用例がない（右頁下図）。同書が板行されるまでの、いずれかの過程での誤写もあり得ようが、巻第十八も十二紙、復元長六四〇センチの長巻であってみれば、この字を一字も交えなかったとも言いきれない。巻第九で挙げた事例もあり、このまま採用してよいであろう。

▲「大手鑑」所収

◀ 掛幅

前掲表⑤ 九五六番歌断簡（徳川博物館蔵。『日本名筆選5』所載）

巻第十九・雑体（第三種）1001〜1068番歌の68首中、40首判明

歌番号	所蔵者等	日本名筆選	日本名筆	古筆学大成	その他・備考
①1007〜1010	個人蔵（重文）	○	○	○	
②1011〜1021	前田育徳会蔵（国宝）	○	○		
③1032・1033	出光美術館蔵 手鑑「見ぬ世の友」（国宝）所収	○	○	○	
④1034・1035	個人蔵		○	○	『日本名跡叢刊38』（一九八〇年一月、二玄社）
⑤1046〜1050	個人蔵 手鑑「筆林翠露」所収			○	同館編『美の伝統 三井家 伝世の名宝』（二〇〇五年十月）
⑥1051・1052	三井記念美術館蔵			○	『古筆学大成1』は模刻本『紀貫之朝臣真蹟帖』転載
⑦1053	清雅堂蔵			○	加瀬藤圃〈一九〇〇—八六〉編『古筆かな字典』（一九七〇年六月）
⑧1054〜1056	『高野切第三種（内）』（昭和十五年六月、武田墨彩堂）所載		○	○	
⑨1057〜1066	東京国立博物館蔵（重文）	○	○	○	

⑥三井記念美術館編『美の伝説 三井家 伝世の名宝』所載

⑥模刻本『紀貫之朝臣真蹟帖』所収

川口 仁美（旧姓内藤）氏復元　平成十二年〈二〇〇〇〉　28首復元（復元当時、含模刻2首）　740cm

1006　(1005)

倣　書

1024　1023　1022　1021　1020　(1019)

倣　書　臨　書

(1045)　1044　1043　1042　1041　1040　1039　1038　1037

倣　書

安生 成美氏復元

平成二十三年〈二〇一一〉 28首復元 748cm

倣　書

臨　書　　倣　書

安生氏の復元は、前掲表⑥の二首断簡（軸装）が公開された後であるが、川口氏の復元当時は『紀貫之朝臣真蹟帖』所収の模刻が知られるのみであった。この折本に刊記はないものの、「蒼海遺珠」の題字を揮毫した千種有功（ありこと）〈一七九七―一八五四〉が「正三位」に就いた天保三年〈一八三二〉から没年の安政元年〈一八五四〉ころにかけて板行され、明治半ばに絶版になったことと思われる（15頁上・中段参照）。内容は寸松庵色紙・名家家集切・亀山切など、紀貫之を伝称筆者とする古筆を忠実に模刻したもので、本書に関わるものとして、第二種の巻第二―一二四、第三種の巻第十八―九八五・巻第十九―一〇〇七～一〇一〇（旋頭歌四首）が収められているが、墨継ぎ箇所を除き、他の古筆同様、大変精度が高い。

ただ、この二首については、一〇五一番歌の作者伊勢の「勢」が、巻第十八巻末歌（一〇〇〇）の作者名のそれとは異なり、右上「丸」の「乙」を書いた後、「ノ」から下の「力」の「ノ」に続け、「力」を「の」のように書いた形。また、①の旋頭歌二首のように草仮名ばかりで書いたところもあるとはいえ、一〇五二番歌における草仮名の多用、特に終句初字の「愛（あ）」は第三種同筆古筆群に用例がなく、これらの解釈に判断を要した。が、真跡断簡の出現により、模刻本のとおりであることが判明した。

ともあれ、⑧の三首は図版が知られるのみであるため、判明率は六十八首中四十首で五八・九パーセント。歌数で見ると残り二十八首、四割を復元すればよいのだが、一〇〇三番歌を除く、巻頭一〇〇一～一〇〇六の五首は長歌で、一巻の総行数ではこの数値が逆転する。つまり、約六割にあたる四メートルを倣書で補わなければならないのである。この試算のもと、一〇〇七・一〇一三・一〇二〇・一〇六二番歌など、現存零本や断簡に示された紙の継ぎ目を守りつつ、料紙十四枚、全長約七・五メートルの長巻に仕上げたのが両氏である。

平安王朝のかなの書の美が、千年の時を経て、いま甦る

「高野切本古今和歌集」復元全巻完成記念展

日　時：2011 年 2 月 8 日（火）～2 月 13 日（日）　午前 9 時 ～ 午後 6 時（最終日は午後 3 時まで）
会　場：筑波大学　総合交流会館・多目的ホール
主　催：筑波大学芸術学系・書コース

鷺野谷秀夫氏ほか撮影

古今和歌集の写本を復元

筑波大学生ら 18年かけ18巻、巻物に

「古今和歌集」の現存する最古の写本「高野切本古今和歌集」を、筑波大の学生らが18年かけて復元した。全20巻の多くが欠落するなか、散逸した原本を書き写すなどし、18巻を元の巻物の形でよみがえらせた。

高野切は、905年ごろに成立したといわれる「古今和歌集」を11世紀半ばに源兼行ら3人が分担して書写したもの。豊臣秀吉が巻九の巻頭17行を分割して高野山の僧に贈ったと伝わることから高野切と呼ばれる。完本の巻五、八、二十の3巻はいずれも国宝に指定されている。

復元したのは筑波大大学院の森岡隆教授の教室。1993年に当時修士課程の手島和典さん（現群馬県立前橋高校教諭）が巻一に着手。卒業生の若松志保さん（鹿児島県立国分高校教諭）がこの1月に巻十七を復元して、全巻がそろった。この間、書コースの19人の大学院生や学生らが復元に参加した。

復元されたのは、江戸時代に原本の一部が修正されていた巻五を含め18巻。巻一、二、三、九、十九の5巻は断簡などがあちこちに残り、巻十八は江戸時代の転写模刻本があるが、ほかの11巻はまったく残っていなかった。

学生らは伝存部分は現物を書き写した。残っていない歌は活字本をもとに、原本の3種類の書風にならって新たに書き下ろした。

用紙は原本通り幅約53センチ、天地26センチの雲母砂子をまいた高野切用紙を使い、原本での紙の継ぎ目や巻末の余白などにも留意したという。完成作品は巻紙にして全体で約100メートルにもなった。

森岡教授は「まだ手を加えなければならない部分はあるが、次々と分割され不完全なものになっていた高野切を約500年ぶりにほぼ元の姿に再現できた」と話している。

筑波大では、復元全巻完成記念展を8日から13日まで学内の総合交流会館で開く。（土田芳孝）

復元された高野切本古今和歌集と森岡教授

このほか、二月七日・八日のNHK水戸放送局ニュース、八日の東京新聞・茨城新聞・常陽新聞朝刊茨城版で報じられ、学内の筑波大学新聞でも、二月七日の二九一号に続き、四月二十五日の二九二号で紹介されました。

『芸術新潮』二〇一一年四月号では「みんなですなる仮名の正典《高野切》復元」の記事が掲載されました（執筆・高山れおな氏。一二七―一二九頁）。

▲ 朝日新聞［2011年2月7日朝刊（全国版・文化面）］

◀ 朝日新聞［2011年2月8日朝刊（茨城版）］

「古今和歌集」最古の写本

「高野切」全巻を復元

筑波大大学院の学生ら

「古今和歌集」の現存する最古の写本で、その多くが欠落していた「高野切本古今和歌集」を筑波大大学院の森岡隆教授の教室が復元し、8日から復元全巻完成記念展を学内で開く。開催を前に7日、復元に参加した学生らが苦労話を語った。

高野切は、905年ごろに成立したとされる「古今和歌集」を11世紀半ばに書写したもの。16世紀に豊臣秀吉が巻9の巻頭17行を分割して高野山の僧に贈ったといわれることから高野切と呼ばれる。だが、全20巻のうち、残っているのは全体の3割程度で、1100首のうち786首が一からの復元になった。

学生らは、伝わっている部分については書き写し、残っていない歌は活字本を参考に、原本の書風にならい補った。残存部分の図版を集めて作成した字典などを参考に復元を進めた。

まったく残っていない巻10を復元した博士前期課程1年の中村裕美子さん(23)は「原本はどういう姿だったのか考えながら草稿作りは大変だった。どこで墨をつけるか、かすれるかなど注意をした。完成してすごく達成感があるし、平安時代の美意識の高さを感じた」

巻19を担当した4年生の安生成美さん(22)は「隣の行を同じ字が重ならないように注意した」など復元の苦労を話した。記念展は13日まで。（土田芳孝）

復元した作品を見つめる学生らと森岡教授（左）

きょうから記念展「平安の美意識感じた」

▼ 産経新聞［2011年2月8日朝刊（茨城版）］

筑波大生ら苦節18年「高野切」786首

古今和歌集 最古の写本復元

古今和歌集の最古の写本「高野切古今和歌集」を筑波大生らが18年間かけて復元し、8～13日、同大総合交流会館で「復元全巻完成記念展」を開く。「高野切」は全20巻のうち完本は3巻だけでいずれも国宝に指定されている。全く現存しない巻もあるほか大部分が欠落している。「高野切」が一度に公開されるのは初めてで、話題を呼びそうだ。

「古今和歌集」は醍醐天皇の勅命で編纂された最初の勅撰和歌集で、紀貫之らが選者となり平安時代の905（延喜5）年に成立。「高野切」は平安時代後期（1150年ごろ）に書写され、現存する最古の「古今和歌集」の写本。仮名の美しさは最高峰とされ、鑑賞や手習いの手本にもされている。

学生らを指導した森岡隆教授は「あまりにも字が麗しいので、貴族や武士らが切り取って茶席の掛け軸などにしたため散在し、ほとんどが欠落してしまった」と説明する。

復元は芸術学系・書コースの学生らが授業で取り組んだことがきっかけ。平成5年に当時の修士課程の学生が本格的に巻一の復元に取り組んだことに始まり、19人の学生や卒業生らが18年間かけて今年1月ようやく全巻を復元した。

学生らは欠落している部分を後に書写された作本から読み取り、高野切で現存していた文字をもとに原本の書風にならって書き下ろした。

当時と同じ縦26センチ、横53センチの用紙を使い、継ぎ目や巻頭の余白などにも注意を払ったという。

巻四に取り組んだ卒業生でつくば市の若葉学園講師、倉持宗起さん(24)は「80首を復元したがどの字があてるか、草稿に1首1時間から1時間半かかった」と振り返る。

4年生の安生成美さん(22)は「担当した巻十九は長歌があり普通の1首の倍の文字数がある。見た瞬間、くじけたが、表具された作品を見て感動した」と笑顔を見せた。

復元したのは全体の約7割にあたる786首で、完成作品をつなげると全体で約100メートルになる。森岡教授は「これで完璧とはいえないが、高野切を約500年ぶりに元の姿に戻した意義は大きい」と、学生らの奮闘に目を細めている。（篠崎理）

復元した「高野切古今和歌集」を見る森岡隆教授（左）と学生ら＝筑波大

▼ 読売新聞［2011年2月11日朝刊（茨城版）］

古今和歌集写本 18年かけ復元

筑波大生 欠落17巻 筆致忠実に

古今和歌集の最古の写本で、王朝かなの最高峰とされる「高野切古今和歌集」を筑波大の学生らが、1993年から18年をかけて復元した。高野切は全20巻のうち現存する完本は3巻のみで、欠落した17巻を同大芸術学系・書コースの学生や卒業生が代々受け継いで補ってきた。つくば市天王台の同大総合交流会館で開かれている完成記念展で、完本の複製を含め約100メートルに及ぶ全巻を展示している。

古今和歌集は10世紀初めに編まれた最初の勅撰和歌集。高野切は11世紀半ばに、源兼行ら3人（2人は不詳）が分担して書写した。豊臣秀吉が巻9の巻頭17行を、高野山の僧に分割贈与したのが名前の由来とされる。

貴族や武士によって切り取られ、掛け軸などに使われたため、完本は巻5、8、20の3巻しか現存せず、国宝に指定されている。1100首のうち786首が欠落している。

復元は同大の森岡隆教授の指導で、93年に大学院生が巻1を仕上げたのが始まり。主に卒業制作として年1人のペースで学生が手を挙げて取り組み、計19人で完成させた。学生たちは、現存する部分から3人の書風を分析し、筆致を忠実に再現した。原本と同じ縦26センチ・横53センチの用紙を使い、現存部分と継ぎ目が合うように行間などにも細心の注意を払ったという。

森岡教授は「高野切は圧倒的に麗しい、かな最高の美。学生たちの力で復元の夢が実現し、1000年の時を経てよみがえらせることができた」と話した。

13日まで午前9時～午後6時（最終日は午後3時まで）。

復元された高野切古今和歌集と森岡教授（筑波大総合交流会館で）

筑波大生受け継ぎ18年 高野切本古今和歌集を復元

きょうからつくばで展示

復元した高野切本古今和歌集を前にする森岡隆教授（左）と執筆者たち＝つくば市天王台の筑波大総合交流会館で

筆遣いを忠実に再現した高野切本古今和歌集の一部

古今和歌集の現存最古の写本「高野切本古今和歌集」全20巻のうち、欠落部分のない「完本」を除く17巻を、筑波大生が代々受け継ぎながら18年がかりで復元した。書き手3人の筆致をそれぞれ忠実に再現、千年の時を経て平安時代のかな書の美しさを伝える幻の遺産を完全復活させた。8日から、つくば市の筑波大総合交流会館で展示される。【安味伸一】

「平安時代のかな書 美しさを堪能して」

古今和歌集は905年ごろに編集された初めての勅撰和歌集。原本は現存せず、写本は平安時代のものだけで六十数種が伝わるが、高野切本は11世紀中ごろ書き写された最古の写本だ。完本は5、8、20巻の3巻しか現存せず、和歌の一部の断片だけが残る巻もあるが、20巻中11巻はそれらない。

筑波大芸術学系・書コースの学生たちが、3人によって書き分けられた写本の書風の特徴を分析。筆に含ませる墨の量の加減や文字のつながりにも配意し、93年から復元に着手した。主に卒業制作として巻ごとに仕上げ、後輩へ引き継がれ、19人が携わった。

古今集1100首のうち786首（77・5％）を復元。作品は1枚の長さ55センチの料紙を張り合わせ、全長約100メートルに達する。

写本が残っていない第10巻（物名、47首）を完全復元した大学院生の中村裕美子さん（22）は「4年生のとき草稿作りに半年、復元に3カ月かかった。書きくせを読み取り、行の流れを解釈するのが面白く、文字を媒体とした美意識の高さを感じた」と話す。

第4巻（秋歌上、80首）を在学中に完全復元した同大OBで茗渓学園中学・高校書道講師、倉持宗起さん（24）は「完本がある第5巻（秋歌下）を数多く練習して雰囲気をつかみ、淡々と筆を進めた」と語った。

指導に当たった筑波大大学院の森岡隆教授は「学術的な価値と、書の美の両方を堪能していただきたい。科学技術は日進月歩だが、書のかなにおいては残念ながら、平安時代が最高の美を発揮した」と話している。

復元全巻完成記念展は13日まで。午前9時～午後6時（最終日は午後3時終了）。

▲ 毎日新聞［2011年2月8日朝刊（茨城版）］

▼ 書道美術新聞954号［2011年2月1日］

「高野切」全巻展、8日開幕

「復元全巻完成記念展」

筑波大で 学生・院生ら18年の労作

「高野切本古今和歌集・復元全巻完成記念展」が二月八日から十三日まで、茨城・つくば市の筑波大学内総合交流会館・多目的ホールで開催される。

同展は、現存最古の『古今和歌集』の写本で王朝かなの最高峰として名高い「高野切」を同大の「書コース」の学生・院生らが平成五年から一八年かけて臨書・倣書作業を分担し全巻復元に取り組んできたものの完成記念展で、各巻の担当者は、▽巻1＝手島和典、古嶺絵利（旧姓久留主）▽巻2＝中谷正▽巻3＝高橋佑太▽巻4＝倉持宗起▽巻5＝吉沢太雅▽巻6＝高橋佑太▽巻7＝橋本貴朗▽巻9＝林信賢▽巻10手島和典、中村裕美子▽巻11＝中溝朋美▽巻12＝佐藤慎也、高橋智紀▽巻13＝若松志保▽巻14＝長内美智子▽巻15＝塩川真理子▽巻16＝油田望花▽巻17＝若松志保▽巻18＝長内美智子、鳥塚篤広▽巻19＝川口仁美（旧姓内藤）、安生成美。なお、完本が現存する巻5、8、20の三巻のうち、巻第5は巻子から割愛されて伝存する重複断簡二首を当初の位置に戻した臨書を、巻8、20については復元は行っておらず、今回展では複製を展示する。

復元作品とはいえ「高野切」全巻がこうして一度に全面公開されたことはかつてなく、話題を呼びそうだ（問い合わせ等は、☎〇二九―八五三―二七一六の同大芸術学系・森岡隆研究室へ）。そこで以下に、今回の復元企画を指導教授として統括してきた同大大学院の森岡隆教授に、解説文を寄稿してもらった。

千年の時を経て、今甦る高野切本古今集

森岡 隆

「高野切本古今集」の復元は、巻五・巻八・巻二十の完本三巻を除く二七巻を補うことだが、巻五は重複揮毫されていた二七〇・二九八番歌の二首が割愛された形で伝わるため、これら二首を元の位置に戻さなければならない。

つまり、一八巻を復元する必要があるが、このうち巻一・巻二・巻三・巻九・巻十九の五巻は多少の零本・断簡が伝存する。復元は、原本と同じ約五三㌢幅の料紙を用いつつ、散逸箇所を仮書で補いつつも、紙の継ぎ目を原本とおりに守る必要がある。巻十八については、かつて完本であったときの転写を模刻した江戸後期の版本が伝わり、字母は現存の断簡との対照で信じてよいものの、字形は第三種のそれと大きく異なっており、修整を要する。その他の一一巻は伝存は皆無なのと、各巻はそれぞれ固有の状況にあり、第一種・第二種・第三種の使用字母を厳守しつつ、各々の書風で長巻に仕上げなければならないわけである。

この至難の企図は平成五年、当時本学の修士課程の学生であった手島和典氏（現群馬県立前橋高教諭）が巻一の復元に着手したことに始まる。

爾来一八年、本年一月に若松志保氏（鹿児島県立国分高教諭）の七〇首すべてを復元した巻十七が成って、これにより遂に全巻千百首が揃った。同じ巻を前後して二名が復元したものもあるが、ほぼ毎年一巻ずつ復元作業を積み重ねてきたことになる。

ただ、復元後に原本や模写の存在が明らかになったものもある。例えば、巻二の九五・九六・巻末一三四番歌断簡や一三一番歌の模写や、巻九の巻末歌の模写と見てよい断簡が出現したりしている。従って今後は、これらについても修正しなければならないが、まずは十一世紀半ばの揮毫から一、〇〇〇年、後奈良天皇が天文十三年（一五四四）三月十五日に巻二十の巻末に識語を添えた直後に、豊臣秀吉から高野山の木食応其（もくじきおうご＝興山上人・一五三六～一六〇八）に巻九の巻頭一七行が分割贈与されてからでも五〇〇年ぶりに全巻の様子がほぼ再現されたといってよく、記念に公開する運びとなった。

それらは、巻七の二・一㌢から巻十九の七・四㌢まで、一巻平均約五㌢で、各巻一点としても全長一〇〇㍍に及ぶ。学内の手狭な施設を使用するので展示スペースの確保に苦慮しているが、この際巻頭から巻末まで、すべてをご覧頂くべく準備を進めている。

つくばエクスプレスが開通したとはいえ、東京からでも近くはなく、展示期間も短いが、日本書道史・書誌学・文学をも踏まえた真摯な学書の一端を覗びご覧頂き、お励ましを賜れば有り難く思う次第である。

書道界唯一の本格総合年鑑
年鑑 書道 2011
定価 二三、〇〇〇円
書原書房刊

▶第一種の書風で統一した題箋

巻7（第二種）

巻1（第一種）

巻16（第三種）

巻9（第一種）

平成19～22年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)課題番号19520092
「高野切本古今集」全20巻の復元研究 ―古筆復元の方法論の確立―
研究成果報告書

高野切本古今和歌集の復元

森岡　隆

〒305-8574　つくば市天王台1-1-1
筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

平成23年〈2011〉5月31日

印刷・製本：株式会社イセブ